序

『立命館アジア・日本研究学術年報』第４号をお届けします。

本研究所が刊行する英文の学術２誌に、和文学術誌の本誌が加わり、いわば研究成果を発信する３輪体制が作られたわけですが、それが年を追って、しっかりと定着してきたことは大変喜ばしく感じられます。言うまでもなくそれは、本誌が毎号、多くの皆さまから温かく迎え入れていただいたおかげであり、ご支援ご鞭撻をいただいていることに、厚く御礼申し上げる次第です。

題名が示していますように、本誌は、立命館学園におけるアジア・日本研究の毎年の成果をお知らせすることをめざしており、その一環として、書評欄では、立命館大学、立命館アジア太平洋大学の教員、研究者を中心とする編著者によるアジアや日本に関する書物を取り上げ、好評をいただいております。本号も、非常に充実したラインナップとなりました。

さて、本号の編集が終盤に向かいつつある段階で、３年を超える「コロナ禍」が、日本では感染防止のための措置が全面解除されるという状況を迎えました。世界的にもそのような流れとなっており、感染防止の規制下で停滞を余儀なくされていた国際的な人流も、一気に再活性化し始めました。アジア・日本研究所での国際研究集会も、対面（オンサイト）開催が増えています。

パンデミックが完全に終息したわけではなく、また、仮に終息したとしても、その困難の中で編み出されたオンラインの国際研究集会の手法を手放す必要もありません。DX（デジタルトランスフォーメーション）を積極的に活用することを、継続していきたいと思います。研究 DX の推進は、これまで同様に、アジア・日本研究所の基本方針の１つであり続けます。

もう１つの基本方針は、アジア、日本の文化的豊穣性を体現する言語の多様性に対応するマルチリンガリズム（多言語主義）であろうかと存じます。2023 年１月に開催された国際政策提言のための多言語フォーラム「Meridian180 フォーラム」では、英語とともに、日本語、中国語（簡体字、繁体字）、韓国語、インドネシア語を用いて、報告・討議・意見交換を深めることができました。また、英語を主たる媒体としている AJI Books も、2023 年６月には、初めての日中韓３言語版を刊行するに至りました。今後も引き続き、マルチリンガリズムの実践を強めていきたいものです。

本誌は、英語版の *Journal of the Asia-Japan Research Institute of Ritsumeikan University* と同様に、オンライン版（デジタル版）と、従来型のプリント版（アナログ版）で発行を続けます。掲載する内容は、研究論文、総説論文、研究ノート、研究サーベイ、研究報告、書評のいずれのカテゴリーでも「学際性」「文理融合」を重視して、人文・社会科学系、自然科学系の多様な分野に対応するように努めております。アジアや日本に関わりのある研究であれば、どの分野の投稿でも歓迎いたします。是非、研究成果の発表の場としてご活用ください。

今後とも、本誌を含めて、国際的なレベルでの「アジア・日本研究」を推進する諸活動にいっそうのご支援、ご鞭撻を賜りますようお願いする次第です。

2023 年７月

小杉　泰
立命館大学 立命館アジア・日本研究機構 副機構長
アジア・日本研究所長、編集委員長